

写し巡礼における身体・空間・時間

近 藤 隆二郎 (元滋賀県立大学環境科学部教授)

Body, Space, and Time along Replica Pilgrimages

Ryujiro Kondo

Former Professor, Faculty of Environmental Science, University of Shiga Prefecture

This study describes the characteristics of the space of a replica pilgrimage site. A typical example is a miniature pilgrimage site with stone Buddhas placed on a hill behind a temple etc. Here, I discuss the contrast with the circular (*kaiyushiki*) gardens as a space to explore and incorporate perspectives such as body theory and projection science.

Miniature pilgrimage sites are often set up for the benefit of the community by devotees who have returned from a pilgrimage to the main pilgrimage site. In doing so, omissions and exaggerations are made, and the result is a reduced space that captures the remnants of the physical experience of "number" and "to make a pilgrimage to a place" which can be called the rhythm of the pilgrimage. The rhythm of the body, "to walk" and "to worship," is expressed in the remnants of numbers (degrees) such as 88 or 33 times. Thus, the miniature pilgrimage site is a projection of this rhythmic remnant onto a local place.

Few people associate a miniature pilgrimage site with a realistic pilgrimage space. Rather, they associate it with "meanings (holiness)" such as O-Daishi-sama and Kannon-sama, which are obtained through the rhythm of the main pilgrimage. In other words, the real information of the main pilgrimage site is omitted, and it is often an action space where only the physical rhythm through pure "points" and "lines" is mapped, a maze space that is easily associated with meaning.

When viewed as a landscape experience, although it has a sequential sequence, there is only a simple repetition that continues, and there are few visual features to appreciate such as a circular garden. It is a simple spatial experience in which physical actions are repeated. While the main pilgrimage is meant to be a "journey" out of the everyday (and sometimes a journey of death), the replica pilgrimage site is a space close to the everyday. To create an extraordinary space in an everyday space, 33 or 88 almost similar "dots" (stone Buddha small shrines) are lined up in a simple, yet in a sense, a kind of bizarre spatial configuration. Because it is a space that is experienced not visually but through physical action, the actual space is not so much of an obstacle for visitors, even if it is in the middle of a town or along a street, because they can obtain meaning through their physical rhythm.

Anyone can create a miniature pilgrimage site simply by arranging stone Buddhas as "dots." It has the simplicity of being created simply by symbolizing. Kaiyushiki gardens, for example, require a gardener's (or landscape gardener's) sense and expertise (skill). At the same time, the ability to appreciate the beauty of the style is also necessary. In the case of a replica pilgrimage site, the target space as a "thing" is not the thing to be evaluated (appreciated). The meaning is acquired through the physical experience of the rhythm of the "objects," and is not premised on regional characteristics or the ability to appreciate them. It is open to the bodies of those who make the journey.

1 写し巡礼は何を「写し」ているのか

1-1 空間史としての写し巡礼

人がいかにその文化のもとに空間を体験し、創造しているかは、ボルノウ『人間と空間』¹や、トゥアン『空間の経験』²、市川『「身」の構造—身体論を超えて』³などで論じられてきた。風景論を説く中村は、「例え

ば、『七福神巡り』や『四国八十八ヶ所巡り』『三十三ヶ所観音巡り』など、日本には何かを束にして経巡るという伝統がある。絵にしても葛飾北斎の『富嶽三十六景』や一遍上人の絵伝のように、視点を一ヶ所に固定せずに動かしていく。『巡る』と何か。それは、身体と大地を一体化させた『棲み、生きる場所』として、両者の縁を結ぶといった呪術的な意味合いがあったのではないか⁴と述べる。

写し巡礼とはどういった空間なのであろうか。本巡礼⁵の何を写しているのか。美術史における「写し」には、「模倣」「臨模」「型」「模写」「複製」「粉本」といった多様な技術や用途が含まれ、その意味は複雑なうえに流動的である⁶。美術史家の島尾は、二項対立的にオリジナルとコピーと捉えるのではなく、『写し』をただ現象として分析するのではなく—私の言い方を許して頂ければ—『作ること』と『写すこと』を含む全体的な価値システムのなかで捉えること⁷という。写し巡礼論で言えば、「写された」巡礼地というよりは、地域にあるひとつの巡礼地としてとらえる眼差しが多く、「写された」プロセスの構造化については、シュパイデル⁸や中村⁹、島崎¹⁰や田中¹¹、近藤¹²、中山¹³らの既往研究はあるものの、未だに空間史としての定置には至っていないと思われる。

本論では、写し巡礼として、とくにミニチュア巡礼地（八十八ヶ所）の空間体験構造について論じたい。縮小空間となっても、「めぐる」という身体性がなぜ残るのか。閉鎖的な空間での継起的な体験は、何を得る空間なのか、といったことを論じる。

1-2 身体感覚としての写し巡礼

全国的な分布や多様性についてもまだ明らかになっていない点の多い写し巡礼であるが、著者は調査対象として兵庫県北播磨地域・和歌山県全域・ハワイを調査し、折をみて国内各地のミニチュア巡礼地を訪れてきた。ミニチュア巡礼地を実体験した身体感覚に基づき、本論を展開していきたい。

多様なミニチュア空間であるが、とくに、寺院裏山などの山道に石仏が88体置いてあるタイプを典型例として扱う。数時間で一周できるこのタイプのミニチュア巡礼地は、1番から88番に向かって巡るわけだが、まいる→めぐる→まいる→めぐる→まいる→めぐるという行為をただ単に繰り返すことになる。多くは見通しの悪い曲がりくねった細い山道に設置されており、次の札所まで迷わないように一本道であることが多い。番号通りにめぐればよく、本尊は異なるとしても景観としては同じような石仏あるいは小祠が山中にある空間でただ身体行為を繰り返す。

自身の経験では、だんだんと意識がもうろうとしていき、今ここは何番かといったことも考えず、ただ単に身体としてめぐるという感覚を覚えたことが多い。88番を過ぎて下界におりたときに、ようやく意識が覚醒していく感覚もあった。こういった自身の経験をふまえ、巡る空間体験としては対比しやすい回遊式庭園との対比をふまえた上で、プロジェクション・サイエンスや身体論からの知見を照射しながら論じていく。

2 シークエンスとしての写し巡礼

2-1 行動的空間

まずは、既にその特徴や評価が定置されている回遊式庭園と対比しながら写し巡礼をみてみよう。回遊式庭園は、回遊しながら見え隠れする景色を鑑賞する身体体験型空間であり、井上が日本建築空間論のなかで「行動的空間」のひとつとしている。「人間の運動を前提とした流動的な空間であり、進むにつれてつぎつぎと変化する空間の継時的な展開が追求される」という¹⁴。写し巡礼は取りあげられていないが、行動的空間の立体的表現として「栄螺堂（三匠堂）」が取りあげられている¹⁵。ベルクは、「日本の空間は『一つの発端を一つの結果に結びつける』ものではなく、『それぞれの状況（場面）が固有の同時性において自発的に現われ、数珠つなぎにされてゆく』という『進行的同時性』のようなものがある」と言う¹⁶。“数珠つなぎ的”に空間認識がされていくという構図には、写し巡礼も含まれよう。

この行動的空間の認識は、古代宗教活動の「遊行」に通じると岩田は言う。「歩くということ、へめぐるということは空間を理解し、身をもって知るためには不可欠のことである。頭のなかにつくられる『世界』地図は、さまざまな知覚と運動感覚の経験を重ねることによってつくられてゆくからである」¹⁷という。定住する空間の中に仕組まれた移動性（へめぐる）である。

2-2 継起的空間（シークエンス）

シークエンス体験は、当然ながら「時間」の導入がある。岩田は「日本の回遊式庭園にあるのは、巡礼の空間構造で全体として円環をなしており、ところどころに名前をついた岩、泉、滝、茶室や小祠などの見所がある。空間に時間の要素が加えられている、そして聖地にあたるスポットがある」¹⁸という。ここに、「巡礼の空間構造」と記されているが、円環の数で全体が完成する身体空間構造の比喩として用いている。また、「へめぐる感覚、時間のエレメント」が加わっているとして、「日本人は空間を基本的に、運動感覚を伴った、経巡り得る場所として知覚するようにプログラムされているのではないか」¹⁹とも述べている。見通すよりも、動きながら時間体験において鑑賞するという行為である。

回遊式庭園の空間特性を分析した材野によれば、その特徴は「空間交替のリズムにゆらぎがあり、リズムによる安定感とそれを破る意外性との複合的空間を創り出す」ことと、「どの経路をとっても、それなりの物語性が感じとれる空間である」ことという²⁰。開放度や奥行度という（経路）空間の大枠に反応しながら、その次に、路傍の樹木や石、看板、サイン等点的・線的な「モノ」や小さな面的な「モノ」で目立つものにインパクトを与えられ、すなわち、人は開放度のような「地」的なものに主に反応して行動しながら、併行してインパクト度のような「図」的なものにも副次的に反応している²¹。

材野は、回遊式庭園を「まろやかな」体験であるという。写し巡礼の場合は、「まろやか」というよりは、むしろ「緊張感」のある空間体験ではないだろうか。シークエンス空間としてみた場合は、空間構成的な開放度はあまり無く、折れ曲がりの単調な特性であり、そこにインパクト度としては、小祠（石仏）がモノとしてあるだけである。回遊式庭園と比するならば、言わば単調で簡素な構成が繰り返される（リズム）と言えよう。景色（視覚）を楽しむ空間ではないため、そこは重視されていない。そこが写し巡礼と回遊式庭園の違いである。

2-3 迷路性

視覚を重視する回遊式庭園と比較すると、写し巡礼空間は迷路的な特徴を持つ。トゥアンは、迷路について「初めは混沌とした空間であったものが、最後には、一つに統合された客観的な場所になる」としている²²。また、「奥」を論じる槇は、「奥性は最後に到達した極点として、そのものにクライマックスはない場合が多い。そこへたどりつくプロセスにドラマと儀式性を求める。（中略）それは、時間という次数を含めた空間体験の構築である。神社の鳥居もこうした到達の儀式のための要素に外ならない」²³と述べる。

寺社の参道空間研究にも、その見え隠れや誘因性が指摘されている^{24,25}。参詣空間の場合、主として到達点である再奥部への誘導がメインとなっており、意識を高めていく空間構成となっている。写し巡礼の場合はそういった到達のシークエンスはない。もちろん石仏の番号があることで、次の札所へ誘う構造にはなっているが、88番において特別なクライマックスはない。高揚感というよりは、円環が終わるという感覚程度である。視覚や聴覚の変化がある程度低減され、歩く身体と向きあうことができる空間とも言える。他人と会わずに歩く、まいる、歩く、まいる、という身体行動が可能となる空間でもある。迷路的ではあるものの、誘導アフォーダンスとしての石仏（番号）があるために、迷う不安はなく、ただひたすらに迷路的な空間をへめぐるといふ身体行為ができる空間になっている。経験から言えば、むしろ「見え」といった視覚ははたらかないような（加味されていない）空間であることが多い。

空間論から巡礼を論じた中村は、迷路性を持つ写し巡礼空間を「他界」への通路として表象されるといふ。三十三ヶ所霊場・三十三所観音の形状から、巡礼ルート of 運動形態概念図を作成し、そのモチーフを抽出し、そのなかの「迷路性」・「上昇」・「上昇・下降」・「円運動」は、死後イニシエーションの場としての「迷路」や、シャーマニズムにおけるシャーマンの「上昇・下降」、曼陀羅における「円運動」のモチーフに対応して観想され、これらのモチーフは「他界へ」を象徴すると言う²⁶。「他界」を象徴するという指摘については、後述する巡礼者の「身」の状態によっても左右されるために、言い切るには議論が必要とは思ふものの、1970年代前後というまだ信仰が残る時代背景の影響も推測できる。ここでは、迷路性から非日常空間へと変貌するとしておく。

2-4 時間・リズム

時間を取り込んだ継起的な写し巡礼空間であるが、借景や連想を埋め込む回遊式庭園のような多層化はなく、むしろ単純化した空間である。石仏と順路がくり返されるだけの、(単調な)リズムが強調されている。音楽で言えば、回遊式庭園が交響曲のようなハーモニーを持っているのに対して、写し巡礼地は「木魚」のような一定のリズムが基層となっているとも言えよう²⁷。

古代都市における身体から都市・自然環境へとつながるリズムを「共存のリズム」として提起したことがある²⁸。(コスモロジカルな)身体のリズムが現代生活から失われて久しい。齊藤は「私的所有の人格的担い手とされたひとの身体は、孤立化し抽象化して、他者と外在的にのみかかわる存在となる。身体の所作は、時間と空間を生産する能力を失い、資本の物象の運動が時間と空間を生産し統治する主体となる。これに対して、修道院の生活においては、修道士の身振りが身体にまとう衣装や暮らしのリズムや修道院の空間と有機的で不可分に結びついていた」という²⁹。儀礼や信仰には、こういった身体が時間と空間と有機的に結びつく世界(リズム)がある。

「リズムの哲学」を展開した山崎は、「する身体」に対して、「ある身体」を生涯という閉じられた時間(生→死)に囚われ、そのことから空間的にも閉塞された世界に生きていると感じる身体のことととらえ、この身体が究極的に願えることは、「自分の生きる世界を外側で閉ざしているリズムの波、その波を起こしている大きなリズムそのものを感じとり、それと共鳴し一体化して生きるべく行動することである」という³⁰。「自転車に乗る」というある振る舞いの一定の「かたち」はすでに共同体のなかに習慣として存在する。共同体の成員が過去に同じように習得したその「かたち」を、自転車に乗る練習では「私」もまた頭に思い描き、その理想像を実現しようとする。つまり、練習とは、共同体のなかにすでに習慣として存在する行動の観念を現在の「私」の身体に呼び起こす営みであるとも言える³¹。

そこで、写し巡礼というリズムは、共同体の習慣として身体に呼び起こすものの、そこにはリアルな本巡礼のリズムではなく、あくまでも〈縮小誇張された〉「かたち」としての観念的なリズムとなっている。本四国のリズムとは、むしろ数ヶ月ほどの遍路という非日常的な時間が人生に入ることを指すのであろう。そして、数時間という短時間の中に88回のまいり、あるき、めぐりという身体行為を繰り返すリズムとは、もはや本四国のリズムの写しとは言えないだろう。「忘我状態は音楽の規則的打拍や、電車の『ガタンゴトン』という規則的な運動によってもたらされるもの³²」であり、自転車の練習のように、最初は細部に集中していた行為が、だんだんと無感覚になっていく。すなわち、写し巡礼に行くという「する身体」から、「ある身体」へと変貌し、めぐっているという感覚さえも忘却して、“大きなリズム”と同調する(呼び起こす)といった空間なのではないだろうか。

言い換えると、写し巡礼地は、本四国へ行くことのできない人のための空間ではあるものの、本四国というリズムへとつながる空間ではなく、本四国「も」イメージしていた大きなリズムへとつながる時空であり、決して本四国への練習ではなく、「お大師さん」へとつながるものである。

3 省略・誇張・記号化する写し巡礼

3-1 縮小・ミニチュア・省略

写し巡礼は本巡礼より小さい。迷路性や身体行動を取り入れながらも、縮んでいく。この「縮む」ということをトゥアンは、「小さいものは、大きいものを映しだす。小さいものは、人間の感覚によって把握することができる。小さいものが伝えるメッセージは、狭い領域に閉じ込められているので、ただちに把握し理解することができる³³」という。本巡礼の代替空間だが、その小ささにはとくに優劣は無かったと思われる。数日を要する距離の写し巡礼が、数時間の小さいものあるいは榮螺堂やお砂踏みよりも優位であるとはあまり聞かない。本巡礼そのものは、長い距離を歩くことに価値があるとされているのに対して、「写し」というカテゴリーにおける意味(功德)のヒエラルキーは見られない。写し巡礼における「距離」に価値の優劣が無いことは、後述の記号化とも関連する。

能舞台、茶室、人形浄瑠璃は、登場人物も舞台も小さく縮んでいる。盆栽、盆景、箱庭と呼ばれるものにも見られるように、小さいことの特徴は全体であり、完全であると同時に、現実のリアルな世界とは寸法があ

わなのために、現実に対しては役立たずのもの、断片的なもの（モデル）でしかない。そして、役立たずであることによって一層その神話性が際立つのである。

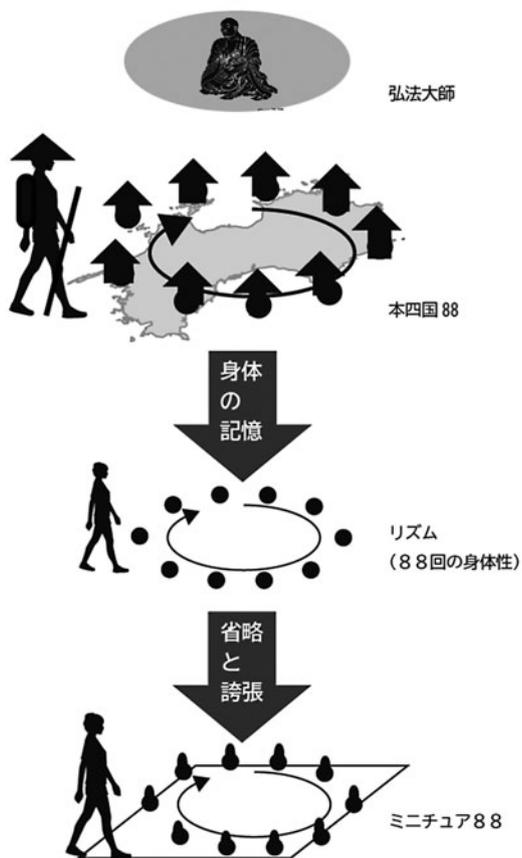


図1 写し（ミニチュア八十八ヶ所）の成立構造



図2 国境碑（浄土寺八十八ヶ所）兵庫県小野市

李は、「縮みの想像力」が日本人のひとつの発想法となつて、多彩な文化をつくりだしているという。「縮み志向」とは、すでに「作られたもの」ではなく、「作っていく」動的想像力だといふ³⁴。事物を単純化し、簡素化するところに美と機能を求めようとした日本人の心を読みとることもできる³⁶。「日本の縮み文化にはかならずといつていくらい一点集中の中心点がありますから、それを見きわめなければいけません。一方では省略し、一方では強調するこの典型的な縮約法の両面性を、またその相互関係を申し分なく表現している姉さま人形をつくる時、もっとも手がかけられているのが、その頭の部分なのです³⁷」という。省略と同時に誇張がある。

鉄船宗熙が『仮山水譜並序』のなかで「三万里程を尺寸に縮める」のが禅宗の庭であると述べる³⁸。禅の庭は本質的には盆景と言え。禅の庭、特に枯山水の庭の意図するところは、あまねく仏法の漲る宇宙の縮図である。原は、「縮小する」という意味はそれ故、単に方法のうえからみて、ちぢめながら開くといったような意味あいであり、〈非ず非ず〉に合せた言い方をすれば、「縮小しながら拡張する」といった意味なのであるといふ³⁹。

同じ縮小（ミニチュア）という動線にある盆景と写し巡礼であるが、その構造は異なる。盆栽や盆景は「見る」対象であり、箱庭療法のように、上からの眼差し（権力的視線）がある。しかし、写し巡礼地は上から眺め見ようとすることはほぼなく、またお砂踏みにしても、棠螺堂にしても、「見る」という行為は強調されていない。あくまでも、水平的に歩く（めぐる）行動を基本とする縮小空間である。

では、写し巡礼空間は何を省略したのだろうか。本巡礼の道中における風景や札所の風景などが省略されている。残ったのは、「点」と「線」である。「点」である札所も限りなく省略されて縮小し、石仏のみである。すなわち、本巡礼ではなく、「巡礼（めぐり）」そのものの観念的構造とでもよぶべきもの（＝「巡礼のリズム」と呼びたい）が縮みながら省略・誇張して残ったものが写し巡礼なのではないだろうか（図1）。

3-2 記号化

省略されて「点」と「線」だけが残るといふことは、そこから意味を読みとらなければならない。つまり、「記号」になる。トゥアンは『見立て』とは、文字通り、『立てる＝制定する眼差し』であり、この方式こそが、詩から庭、風景に到るまで、古めかしい、もしくは更新された常套句の形をとって、自分から他者へ、ここからあそこへ、今から過去への絶えざる引用で日本の風土を織りなしてきたのである。この『……として見る』は、単なる転義以上のもので、記号をその固有の意味内容からそらすだけではなく、引用という回り道を通して、同じ記号に新たな固有の意味を表現させることなのである⁴⁰といふ。

ミニチュア巡礼地の記号化の代表例は「国境碑」である（図2）。本

巡礼は周知のように4ステップの道場になっており、国（県）境は段階としての重要な意味を持つ。本巡礼路にはこのような明確な国境碑は無く、短時間における写し巡礼路の「段階」を記号として明示する。記号化されている空間であることを何よりも象徴していると言える。

中村は、巡礼霊場をひとつの環境体としてとらえ、そこにおける空間イメージを「人」と「物」との関係づけによってとらえたとき、移動する視点を有する巡礼者・札所・みちなどの組織化されたさまざまな記号、さらに継體的体験に要する時間の諸要素が巡礼霊場を規定するとした上で、巡礼者は継時的体験の結果イメージの線的な複合として空間を獲得すると述べる（図3）⁴¹。中村は着目すべきものとして2点—①いわゆる「行動的空間自体のもつシンボリズム、②宗教的実在である外界としての巡礼霊場の記号化された空間構造—を挙げている。⁴² ①はシークエンスで取りあげた特徴であると共に、「巡礼のリズム」という身体行動にもつながる点である。②の記号化に関しては、「三十三番観音巡礼自体が既に記号化されたもの」であるとして、経路のパターン化を試みている（図4）。すなわち、点と線で経路パターンを描けるのである。小嶋が「西国巡礼や四国遍路をはじめとする日本の回遊型巡礼の多くには、共通する“型”とでもいべきものがある」と述べることに通じる。⁴³ 著者も既往研究⁴⁴において、経路パターン化を行ってきた。回遊式庭園は、より緻密であるために、このようなパターン化できない。それほど記号化しているとも言えよう。

写し巡礼の記号化については、岩田も次のように述べている。「へめぐる空間における視線は、歩くにつれて変化してゆくが、その時その時に見ている対象は、局所的なものである。空間を経験として知りたいという欲望には充分こたえるものであるが、全体として知りたい欲望にはこたえない。縮小された三十三ヶ所が裏山に作られるのは、たえず記号化された全体の知識を記憶させようということともいえる」⁴⁵。「へめぐる空間」には、回遊式庭園も含まれる。材野の論に依拠すれば、回遊式庭園の空間体験は、「人間は空間構成の開放の程度（開放度）や奥行性によって足の方向や身体の向きのような行動の大枠を規定されながら、目立つ石や際立つ樹木等のインパクトのある物的要素（インパクト要素）を首や目の動きのような身体の局部でとらえているもの」⁴⁶であり、「地」としての性格をもつ「空間構成」と「図」としての性格をもつ「物的要素」が、相補性と連繋性の両方の働きをしながら人間の景観行動を誘発しているという⁴⁷。単純記号化しているミニチュア巡礼地の場合は「地」としての経路と「図」としての石仏のみとなって、鑑賞というよりは記号化の作用が高くなっていると言えよう。

ミニチュア巡礼地の番外として、本四国でも「こんぴらさん」として著名な金比羅宮が写されている場合がある（図5）。多くの場合、小祠の前に数段の石段があり、長い石段



図5 金比羅宮の写し（善光寺 [東の森] 八十八ヶ所）和歌山県田辺市下露

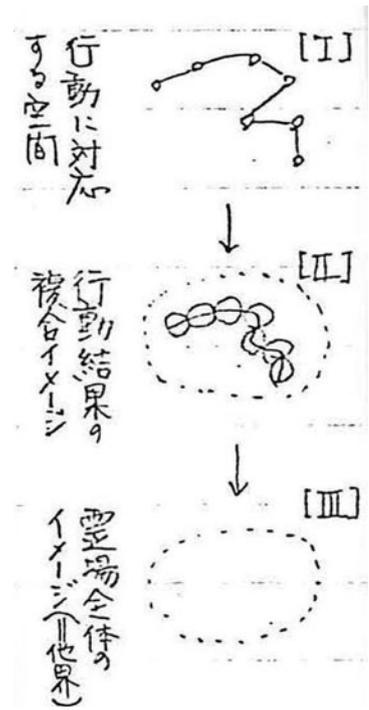


図3 巡礼霊場におけるイメージの形成プロセス

中村精二(1973): 巡礼霊場の形態とその空間認識—日本の宗教空間—, 昭和48年度東京芸術大学大学院修士論文, p.297

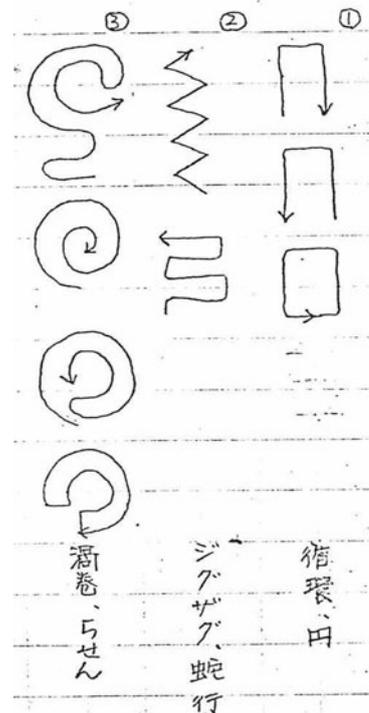


図4 巡礼霊場（三十三ヶ所）における経路パターン

中村精二(1973): 巡礼霊場の形態とその空間認識—日本の宗教空間—, 昭和48年度東京芸術大学大学院修士論文, p.299

が特徴である金比羅宮も身体の行動として記号化している。ところが、必須である88点になる札所については、その本札所を連想するようなものはほとんどない。同じような石仏+弘法大師像という点になっている。例えば、雲辺寺（六十六番）や岩屋寺（四十五番）といった特徴的な空間であっても、その景観の形式は写されない。この点については、「歩き遍路にとって、札所は遍路行のペースメーカーである。しばしばいわれることだが、西国巡礼などに比べて四国遍路の札所は個性や存在感に乏しく、個々の寺院の記憶や印象は曖昧になりがちである。一方で、寺院名ではなく番号で呼ぶことも通例化しているように、巡礼者が強く意識するのが札所の数字である」⁴⁸ ことにも通じる。すなわち、点という記号になっている。本札所や本巡礼を連想するよりは、点のむこうに想像がはたらく。写し巡礼は、「点」を「経巡る」という「身体行動（巡礼のリズム）」を記号化して写したものと言えるのではないか。

3-3 プロジェクション

記号化した写し巡礼空間を経巡ることで、何が心的に生成するのだろうか。近年の枠組みであるプロジェクション・サイエンスを援用してみる。⁴⁹ 人は世界から情報を受容し、生成された内部モデルを作り出すだけでなく、それを世界へと投射＝プロジェクションしている。その結果、世界は物理的な情報を受動的に処理することにとどまらず、その生体にとって独自の意味に彩られた *projected reality* として認識されることになる。⁵⁰ すなわち、記号化された点と線であるミニチュア巡礼地から、なにを内的意味としてプロジェクションするのであろうか。

プロジェクションとして取りあげられるモノマネの産出には、三つの要素—モノマネの対象となる人間や動物の声や行動・状態、②対象について構成された内的な表象、③モノマネをおこなう主体（の身体・声・行動など）—があるという。⁵¹ つまり、投射されているものは対象（マネされている人）についての表象であり、そこに存在するものはモノマネをおこなう主体（マネしている人）だけである。目の前にいないはずの人がモノマネによって見えてくる、ここにプロジェクションの働きが見られる。⁵² プロジェクションの観点によるふたつのモノマネの違いは、モノマネの対象が具体的に実在するか（異投射モノマネ）、実在しないか（虚投射モノマネ）ということにある。⁵³ 写し巡礼が写しているものは、本四国という実在（異投射）のように見えつつ、そこには「お大師さん」という虚投射ではないだろうか。⁵⁴

ミニチュア巡礼地を、「模型」というモノマネしてとらえることもできる。「模型はオリジナルの縮小表現である。しかし、その再現の過程でオリジナルからずれていくところこそ、模型的なものの価値が生じてくる。こう考えていくと、例えば『うつし』の概念も模型的である」⁵⁵ という。「上手な」モノマネとは、実在する対象の完全なコピーではない。実在する、あるいはいかにも実在しそうな対象の特徴を、しっかりととらえた「明確な表象」があることが重要である。そのうえで、その表象が主体によって「的確に投射」されている必要がある。⁵⁶ 上手なモノマネとは、このような観客の投射をうまく誘発して、演者と観客のあいだで鮮明なプロジェクションを共有できた時に成立する。「つまり、自分の無意識のなかにあった漠然としたイメージが顕在化され、はっきりとしたかたちをとって見えた時、私たちはそれをとても気持ちの良い感覚としてとらえる」⁵⁷ のである。

モノマネとしての写し巡礼は、縮小記号化した表象としてそこにある。モノマネとしてはしかし、本巡礼とあまりにも違う。点（番号）と線とめぐり（身体）である。盆景や坪庭といった同様の過程と異なるのは、ジオラマ的な上からの目線ではないところである。あくまでも、点としての番号を繰り返し巡っていくという水平的なへめぐる視線体験が重視されており、その身体リズムによって、わたしたちはプロジェクションを成立させている。

ベルクが長安のコピーである平安京について「複製はオリジナルより規模が小さい」と同時に、「複製はオリジナル以上に完全だった」と指摘する点に虚投射のヒントがある。⁵⁸ 「平安京は現実の長安のコピーではなく、中国の首都の建設者自身が典拠とした理念的モデルの現実化だったのである」⁵⁹ この構図を用いれば、本巡礼の複製である写し巡礼は、オリジナル以上に「完全な理念的モデル」を表象していると言えるのではないだろうか。

4 身体論からの写し巡礼

4-1 生きられる空間・溶解体験

身体と空間の関係では、スケートボーディング⁶⁰やパルクール⁶¹、ランニング⁶²等が積極的な意味を付与されて論じられつつある。写し巡礼という身体行為も同様に捉えられるだろう。ボーデンは、スケートボーディングを身体による建築批評であり、陳腐化した日常生活への抵抗を通して新たな都市空間の創造するものとしてとらえる。スケートする身体やリズムが都市景観の中に刻み込まれていくという。スポーツする身体やリズムを空間との関係から重視するのは、「へめぐる」ことについての研究でも適用することができる。では、なぜ縮小記号化しても「めぐる」という身体行為が残っているかについて、身体論を援用しながら考察する。

当然ながら巡礼という行為そのものが身体経験である。五体投地しながら巡礼路を進むと、一度に自分の身長分しか進むことができない。このような極端な身体経験によって、自己を失うことで、自分ではない他の何かになるという体験を味わう。このような体験は、「一種のエクスターゼ（恍惚、忘我）の状態でもあり、ほかにも祭祀儀礼や芸術制作といった実践を通じて体験できる」⁶³のものであり、「一瞬一瞬が意味をもつ。自分で歩くひと足ひと足が、現実に彼らを聖地に近づける」⁶⁴行為である。

ベルクは、茶の湯といった儀式における身体性について、「儀式の遵守の正確さ」が人間と宇宙をつなぐ空間の尺度としての精神幾何学になると述べている⁶⁵。ルフェーブルは「身ぶりはさまざまな空間を生み出す。身ぶりによって、身ぶりのために、さまざまな空間が生産されるのである」という⁶⁶。つまり、身体的習慣ないし身体的技能の獲得によって、身体の志向性の働き方が変わり、それによって身の回りの世界や、対象の意味も異なって経験されるようになる⁶⁷。

近代世界は、「身体と空間、身体と時間のリズムとの関係が断ち切れ、身体の抽象化、空間と時間の抽象化と客観化の過程が進行する」⁶⁸のである。都市住民の身ぶりが、生きられる身体による空間と時間の創造であることをやめて、抽象的身体となり、抽象空間が生産されるようになったためである⁶⁹。ルフェーブルは「都市社会の実践」を「人間による時間と空間の獲得 [内化]」と呼び、これを「自由の最高形態」と言う⁷⁰。身体が時間と空間を住まいとして世界を構築する実践こそが自由の最高形態であり⁷¹、身体の手を駆使した実践がみずからの住まう世界を創造するという欲求、これこそが人間存在の根源的な欲求であるという。

身体経験を繰り返すミニチュア巡礼地は、儀礼的でもあり、溶解体験としてのエクスターゼを連想する空間となっているのではないだろうか。留意すべきは、本巡礼である四国遍路とは異なる身体図式となる点である。本巡礼はむしろ次の札所へ向かうという明確な意図があるが、ミニチュア巡礼地は、次の札所へ行くという意図は小さい。ほぼ迷うこと無く次の札所が現れるために、儀礼的に（無意識に）歩きを繰り返すことができる。「現代の巡礼は、追いかけてくるクロノスから逃れ、歩くことで天地と直接に触れ合い、そのことを通してせめて身体感覚だけは取り戻し、コスモスのいくばくかを感じ取ろうとしているかのようである」⁷²と言うように、身体と空間、身体と時間のリズムとの関係が絶たれている社会で、巡礼という時空において再統合しようとしている。

自他の身体の共鳴的、相互的な関係（「間身体性」）の創造、再構造化を志向することが、意味生成としての「身体教育」であると論じる久保は、人間の「身体図式」は、さまざまな「身体運動」において同調とした上で、共鳴的、相互的な身体と身体のつながりを「間身体性」とする⁷³。そして、「間身体性」という身体相互関係において、人間は「溶解体験」を生起するという。これは無意識の内に、共有の、共鳴的、相互的な身体と身体の間が生じた「からだでつながりを感じる体験」であるとする⁷⁴。中村良夫の風景論を土台にして、身体性に基づく風景論を展開する吉村は、「身が消滅」している状態として、風景の出現の過程であると同時に、身すなわち体験者自身の変容、「変身」の過程そのものであると言う。そこでは、環境は「身体化された環境」として、文字どおりに「生きられる」ものと捉えられる⁷⁵。つまり、写し巡礼においては、本四国には無いひたすら反復される身体運動により、溶解体験を生じ、身体と環境（コスモス）がつながる体験を持つのである。

吉村はさらに、視点場概念に適用することで、「視点場は身体である」とした上で、「風景を造る」とは、「身体を造る」とことと捉えられるという⁷⁶。写し巡礼という体験は、風景というよりは、都市生活において断

絶され孤立化した身体が、あらためて大きな世界観・コスモロジーとつながる場なのである。

4-2 マインドフルネス空間へ

以上のように、ミニチュア巡礼地は、エクスターゼする空間でもある。身体をコスモスにつなぐ回復空間でもあり、マインドフルネス空間としても定置できよう。マインドフルネスで著名なティク・ナット・ハンは、「歩く瞑想では、ただ歩くことを楽しむために歩きます。そのコツは、どこかにたどり着くために歩かないことです。(中略) 特定の目標や目的地を定めずに、ただ歩くことを楽しみます。歩く瞑想は、目的を達成する手段ではありません。歩くために歩くのです。」⁷⁷という。

ドイツやポーランドなどでは、森林を活用した自然療法の実践例が進んでいる。ドイツの自然療法に利用される森林では、自然地形を活かした療法道（セラピーロード）が20分ユニットで幾通りも設計されている。また、散策に際しては、療法士（セラピスト）が同伴し血圧・脈拍を測定しつつ、テンポを一定にして歩くことを指導するという⁷⁸。国内でも森林セラピーの森として認定や活用が進んでいる⁷⁹。篠栗霊場には、すでに『心の湯治場～森の鼓動が聞こえる 遍路の郷』⁸⁰と称して森林セラピー基地の場となっているエリアもある。

写されたミニチュア巡礼地の保安全管理については、宗教的信仰的な意味合いは希薄化しており、その意味や価値が理解されなくなっている。景色や環境の良いところだと、都市近郊の散歩コースなどとしてウォーキングコースとして整備されるケースもある。眺めが良くなくても身体性回復のコースとして価値があると言えるのではないか。順路が決まっているので、安心して（何も考えずに）歩くことができる。瞑想するような空間・場が生活圈から消え去ってしまっている。マインドフルネスを実践できる場としてのミニチュア巡礼地の再定置が可能である。「グローバルヒーリングセンター」として再生されつつあるラワイ88ヶ所（ハワイ）の事例⁸¹のように、意味が再創される事例もひとつの示唆を与えてくれる。

5 まとめ

ミニチュア巡礼地は、本巡礼詣でから戻った篤信者が地域のために設置したものが多い。その際、省略と誇張が行われており、結果的には、「番号」と「へめぐる」という“巡礼のリズム”とでも言うべき身体体験の残影を写した縮小空間となった。「あるく」「おがむ」という身体のリズムが八十八度、三十三度といった数字（度数）と共に残影したものである。このリズムで構成される残影をローカルな場に投射したものがミニチュア巡礼地である。

このミニチュア巡礼地をめぐることで、リアルな本巡礼空間を連想する人は少ない。むしろ、「お大師さま」「観音さま」といった、本巡礼のリズムを経て得られる「意味（聖性）」を連想する。つまり、本巡礼地のリアルな情報は省略されており、純粋な「点」と「線」を経る身体リズムだけが写された行動的空間であり、

意味を連想しやすい迷路空間である場合が多い。

景観体験として捉えると、継起的なシーケンスは持つものの、そこには単純な繰り返しが続くだけであり、回遊式庭園のような視覚鑑賞的な特徴は少ない（図6）。身体の行動がくり返される単純な空間体験である。本巡礼が日常を脱する「旅」（時には死出の旅）としての意味合いがあるのに対して、写し巡礼地は日常に近い空間である。日常空間に非日常空間をつくる

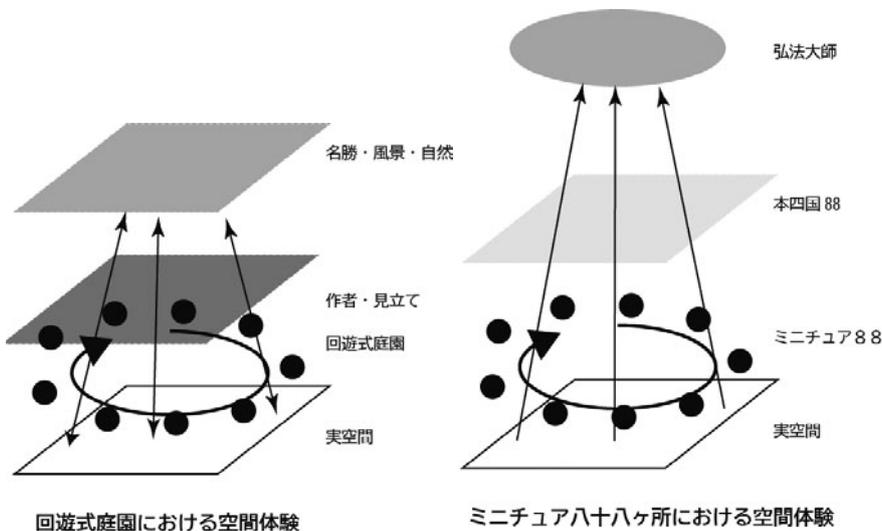


図6 回遊式庭園とミニチュア八十八ヶ所における空間体験構造の比較

ためにも、ほぼ同様な「点」(石仏小祠)を33体、88体並べるといふ、簡素でありつつもある意味では一種異様な空間構成を持つ。視覚ではなく、身体行動により体験する空間であるために、まちなかや街道筋にあったとしても、巡拝者にとっては、身体リズムによって意味を得ることができるために、実空間がそれほど邪魔にはならない。

「点」としての石仏を並べることだけで、誰もがミニチュア巡礼地をつくることができる。記号化するだけでできあがる簡素さを持つ。回遊式庭園などは、庭師(造園)としてのセンスと専門技術(スキル)が必要であった。と同時に、鑑賞力も必要であり、そこには様式美がある。写し巡礼地は、「モノ」としての対象空間が評価(鑑賞)されるものではない。「モノ」が構成するリズムを身体体験することによって、意味が体得されるのであり、地域性や鑑賞力を前提としない。めぐる人の身体に対して広く開かれているのである。

註および参考文献

- 1 オッター・フリードリッヒ・ボルノウ／大塚恵一・池川健司・中村浩平訳(1978)：人間と空間，せりか書房
- 2 イーファー・トゥアン／山本浩訳(1993)：空間の経験，筑摩書房
- 3 市川浩(1984)：「身」の構造—身体論を超えて，青土社
- 4 中村良夫(2022)：鼎談「遺産を経巡り、ニワを遺す」における発言，土木学会誌，Vol.107，No.8，p.7
- 5 本巡礼とは、四国八十八ヶ所や西国三十三ヶ所といった、写されるものを示す。
- 6 亀田和子(2013)：はじめに—「Utsushi」から「写しの力」へ，『『写し』のカー創造と継承のマトリクス』(島尾新・彬子女王・亀田和子編著)，思文閣出版，pp.6-7
- 7 島尾新(2013)：序，前掲書(島尾新・彬子女王・亀田和子編著)，p.2
- 8 マンフレッド・シュパイデル(1975)：建築人類学ノート／日本の巡礼地①～⑫，a+u(建築と都市)
- 9 中村精二(1973)：巡礼霊場の形態とその空間認識—日本の宗教空間—，昭和48年度 東京芸術大学大学院修士論文，pp.1-302
- 10 Tanaka, Hiroshi (1981)：The Evolution of A Pilgrimage as A Spatial-Symbolic System, CANADIAN GEOGRAPHER, xxv. 3, pp.240-251
- 11 田中智彦(2003)：日本における諸巡礼の発達，「聖なるものの形と場」，国際日本文化研究センター，pp.255-243
- 12 近藤隆二郎(1993)：北播磨のミニチュア巡礼地における空間体験構造に関する研究，造園雑誌 56(5)，pp.247-252
- 13 中山和久(2008)：模倣による巡礼空間の創造—篠栗四国霊場の表象と実践，哲学，119，pp.65-109
- 14 井上充夫(1969)：日本建築の空間，鹿島出版会，p.287
- 15 井上充夫(1969)：前掲書，p.288
- 16 材野博司(1997)：庭園から都市へ—シークエンスの日本，鹿島出版会，p.201
- 17 岩田れい子(1992)：日本庭園における空間の知覚について，造園雑誌，56(4)，p.330
- 18 岩田れい子(1992)：前掲論文，p.331
- 19 岩田れい子(1992)：前掲論文，p.331
- 20 材野博司(1997)：前掲書，p.150
- 21 材野博司(1997)：前掲書，p.105
- 22 イーファー・トゥアン／山本浩訳(1993)：前掲書，p.132
- 23 横文彦他(1980)：見えがくれする都市，鹿島出版会，pp.220-221
- 24 藤居良夫・中島直弥(2016)：シークエンス景観に着目した大規模寺院の参道空間に関する研究，信州大学環境科学年報38号，pp.1-7
- 25 高橋睦・石川幹子(2004)：円覚寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究，日本造園学会誌，67(5)，pp.659-664
- 26 中村精二(1973)：前掲論文，p.289
- 27 著者はかつて歩行空間を音楽記述法によって分析する研究をしていたこともあり、その観点から「木魚」を使ってみた。参照：近藤隆二郎・守谷光平(2003)：歩行空間の変化性からみた「歩行感覚」のシークエンス表記方法に関する研究，ランドスケープ研究，66(5)，pp.711-714
- 28 盛岡通・近藤隆二郎(1996)：共存の都市計画，講座「文明と環境」シリーズ第4巻「都市と文明」(金関恕・川西宏幸編)，朝倉書店，pp.291-312

- 29 齊藤日出治(2022)：生きられる身体・時間・空間の世界へ. 近畿大学 日本文化研究所紀要, (5), p.106
- 30 山崎正和(2018)：リズムの哲学ノート, 中央公論社, p.91
- 31 飯沼天空(2022)：山崎正和の身体観におけるリズムの役割. 文化交流研究, 17, p.13
- 32 飯沼天空(2022)：前掲論文, pp.4-5
- 33 イーファー・トゥアン(1993)：前掲書, p.158
- 34 李御寧(1984)：「縮み」志向の日本人, 講談社, p.37
- 35 李御寧(1984)：前掲書, p.74
- 36 李御寧(1984)：前掲書, p.73
- 37 李御寧(1984)：前掲書, pp.76-77
- 38 木村三郎(1986)：枯山水論の行方, 造園雑誌 49 (5), p.68
- 39 原広司(2007)：空間<機能から様相へ>, 岩波書店, p.295
- 40 オギユスタンベルク／宮原信, 荒木亨訳(1996)：都市の日本—所作から共同体へ, 筑摩書房, pp.50-51
- 41 中村精二(1973)：前掲論文, p.297-298
- 42 中村精二(1973)：前掲論文, p.299
- 43 小嶋博巳(2007)：遍路と巡礼, 「四国遍路と世界の巡礼」(四国遍路と世界の巡礼研究会編), 法蔵館, p.18
- 44 近藤隆二郎(1998)：和歌山県下における地域的巡礼地の展開過程と空間構造, ランドスケープ研究 61(5), pp.465-470
- 45 岩田れい子(1992)：前掲論文, pp.331-332.
- 46 材野博司(1997)：前掲書, p.144
- 47 材野博司(1997)：前掲書, p.176
- 48 星野英紀・浅川泰宏(2011)：四国遍路—さまざまな祈りの世界, 吉川弘文館, pp.189-190
- 49 鈴木宏昭編著(2020)：プロジェクション・サイエンス, 近代科学社, pp.1-238
- 50 鈴木宏昭：プロジェクション・サイエンスとは, プロジェクション・サイエンス研究会web https://www.projection-science.org/about_projection_science/entry-45.html
- 51 久保(川合)南海子(2022)：「推し」の科学—プロジェクション・サイエンスとは何か, 集英社, p.117
- 52 久保(川合)南海子(2022)：前掲書, p.118
- 53 久保(川合)南海子(2022)：前掲書, p.118
- 54 幫間としての二朱判の吉兵衛が、マネをした伝九郎亡き後に、実際の役者として出たものの、徐々に人気落ちていったが、芸風を変えて滑稽ふるまいを強調するようになったということは、写し巡礼における再創の流れと同じように捉えられるとも思うが、別稿としたい。参照：石井公成(2017)：<ものまね>の歴史—仏教・笑い・芸能, 吉川弘文館
- 55 清水重敦(2006)：模型的建築, 「復元思想の社会史」(鈴木博之編著), 建築資料研究社, p.58
- 56 久保(川合)南海子(2022)：前掲書, p.119
- 57 久保(川合)南海子(2022)：前掲書, pp.121-122
- 58 オギユスタンベルク／宮原信, 荒木亨訳(1996)：前掲書, p.54-55
- 59 オギユスタンベルク／宮原信, 荒木亨訳(1996)：前掲書, p.55
- 60 ボーデン, I／齋藤雅子ほか訳(2006)：スケートボーディング, 空間, 都市—身体と建築, 新曜社
- 61 平石貴士(2022)：パルクールの歴史と先行研究および宮城県富谷市における実践例, 立命館大学人文科学研究所紀要, (130), pp.7-27.
- 62 福田珠己(2021)：街中を「走る」—スポーツする身体と都市空間に関する地理学的研究—, 2021年人文地理学会大会研究発表要旨, p.25
- 63 張詩雋(2021)：神仏の肖像 チベット・タンカの制作と崇拜について, 文化人類学, 85(4), p.651
- 64 小林正佳(1991)：踊りと身体の回路, 青弓社, p.30
- 65 オギユスタン・ベルク／宮原信, 荒木亨訳(1996)：前掲書, p.92
- 66 アンリ・ルフェーブル／齊藤日出治訳(2000)：空間の生産, 青木書店, p.318
- 67 榎原哲也(2017)：身体の志向性, 連載「現象学のキーワードで捉える看護事例」第3回, 教養と看護, https://jnapcdc.com/LA/sakakibara_03/
- 68 齊藤日出治(2022)：前掲論文, p.80
- 69 齊藤日出治(2022)：前掲論文, p.111
- 70 アンリ・ルフェーブル／今井成美訳(1970)：都市革命, 晶文社, p.176

- 71 齊藤日出治(2022)：前掲論文, p.114
- 72 黒木幹夫(2009)：巡礼とは何か：カイラス巡礼と四国遍路, 愛媛大学法文学部論集, 人文学科編, 26, p.20
- 73 久保正秋(2018)：意味生成としての「身体教育」の可能性. 体育学研究, 63(1), pp44-45
- 74 久保正秋(2018)：前掲論文, p.45
- 75 吉村晶子(2015)：風景論の展開—構造と反構造のダイナミズム, 「日本風景史—ヴィジョンをめぐる技法」(田路貴浩・齋藤潮・山口敬太編著), 昭和堂, p.408
- 76 吉村晶子(2015)：前掲書, p410
- 77 テイク・ナット・ハン／島田啓介・馬籠久美子訳(2015)：ブッダの幸せの瞑想—マインドフルネスを生きる, サンガ, pp.39-40
- 78 平野秀樹(2007)：癒しのランドスケープ, 「環境デザイン学—ランドスケープの保全と創造」(森本幸祐・白幡洋三郎編), 朝倉書店, pp.69-70
- 79 森林セラピーソサイエティ <https://www.fo-society.jp/>
- 80 森林セラピー基地 篠栗 <http://www.sasaguri-therapy.jp/>
- 81 近藤隆二郎(2005)：ハワイ日系人社会における写し巡礼地の成立と変遷, ランドスケープ研究, 68(5), pp.435-438